

# 学位論文審査の要旨

学位申請者	澤田 篤子 人文科学研究科修士課程 1975年9月修了		論文題目	平安期から鎌倉期における声明理論の形成過程—『悉曇藏』および『声明用心集』を中心として—
審査委員	主 査:	永原 恵三 教授	インターネット 公表	学位論文の全文公表の可否 : 否
	副 査:	井上登喜子 准教授		「否」の場合の理由
	副 査:	伊藤美重子 教授		<input type="checkbox"/> ア. 当該論文に立体形状による表現を含む
	審査委員:	和田 英信 教授		<input type="checkbox"/> イ. 著作権や個人情報に係る制約がある
	審査委員:	松岡 智之 准教授		<input checked="" type="checkbox"/> ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている
学位名称	博士 (人文科学) (Ph. D. in Musicology)			<input type="checkbox"/> エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている
学力の確認	学力確認については、経歴及び業績の審査をもって代え、十分な学力があることを確認した。			<input type="checkbox"/> オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている
				※本学学位規則に基づく学位論文全文のインターネット公表について

## 学位論文審査・内容の要旨

本論文は、声の音楽としての声明における旋律の形成過程を、平安期から鎌倉期にわたる時期に着目し、後世の日本伝統音楽における声楽の旋律形成原理に繋がるマクロ的視座を据えながら、むしろ個々の声明理論のミクロ的な視座における詳細な文献資料研究を元にして、あぶり出した重厚な研究である。従来の音楽学において、声明の音楽的側面は雅楽の理論を援用し、その根底にある様々な解釈などから複雑で難解なものとされてきた。しかしながら、澤田氏は現行の声明曲の旋律に反映された音律論や実際に唱えられる旋律から、旋律生成の原理を解き明かすことを追究し、声明それ自体からその旋律生成の過程を解明する立場をとり、具体的には安然による『悉曇藏』と湛智による『声明用心集』を中心にして、その理論形成過程を明らかにした。

論文の内容は、第Ⅰ部、第Ⅱ部および結論からなり、第Ⅰ部では『悉曇藏』および同書から『声明用心集』に至る時期の音楽理論の状況を明らかにしている。まず『悉曇藏』において、安然が声明における声の質や仏教儀礼における声の表現性に強い関心を抱いていたことの根拠を示し、さらに、安然の音・声・息の理論を抽出し、呂と律、六調子などの原型に関する最初の記述を明らかにし、そこに音や声などの美的あるいは感情的側面への注視などを読み取っている。また、『悉曇藏』以降で『声明用心集』以前の『梁塵秘抄口伝集』、『懐竹抄』、『管弦音義』を検討し、「嬰」の初例など、雅楽などの器楽に依存した音律論からの脱却を図る萌芽的な声の理論を見いだしている。第Ⅱ部では、『声明用心集』を拍子論以外の全巻の音楽理論的分析を行ない『悉曇藏』に由来する音の働きにおける理論概念を導き出し、声の理論すなわち声律論の礎とも言える概念である「由」(ゆ、ゆり)が提示されたことを明らかにし、『声明用心集』以降の文献も含めて、五音の働きについても呂曲、律曲それぞれで明確に説明を加えている。結論として、第一に、安然が『悉曇藏』において息を基盤とした声の論、声律論の体系化を図ったことなどを明らかにし、第二に、湛智が『声明用心集』において『悉曇藏』を拠り所として、五行の支配から解放された音楽理論の構築を目指したこと、声明を器楽である雅楽から引き離すことで、器楽に依存しない声の音楽理論(声律論)の構築が目指されたこと、第三に湛智以降の声律論の展開を示した。このように、澤田氏の論文は、本来、現実の音楽から帰納されるべき音楽理論が、声明において従来、雅楽という器楽の音楽の理論からの援用によって成り立っていたことに対して、声明の実践家であった安然による『悉曇藏』に記された声の音楽としての声明の考え方を抽出し、後代の湛智による『声明用心集』へと繋ぎ、さらにはその後の声律論へと展開してゆく過程を明らかにしたものである。

本論文の審査は2月7日に開催され、澤田氏の論文がその長年にわたる研究の集大成とも言える重厚でかつ野心的、先進的なものであって、その内容は音楽学における日本音楽史の分野に大きく貢献するものである、と判断した。記載上の修正を求めて、2月19日に公開発表会と最終試験を実施した。公開発表会では、多くの出席者があり、日本音楽の専門諸氏を交えて活発な質疑が行なわれた。その後の最終試験では澤田氏の数多くの業績が評価され、また、薬師寺の重要な儀礼である「最勝会」の復興上演の中心的役割を担ったことも高く評価し、宗教儀礼の実践のなかにある声明の研究者としての活躍が認められた。

論文審査及び最終試験の結果、審査員全員一致で合格と判断し、博士(人文科学)(Ph.D. in Musicology)の学位に相応しく、本学の学位論文として秀逸な水準にあると判断した。